
それぞれ

kino

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
それぞれ

【Nコード】
N9908A

【作者名】
kino

【あらすじ】
カカナとユースケ、それぞれの歩む道。

「裕福な民、その民に彩られた幸せな村、例えばそのような空間にさえ、人間を落とす場所が常にある」

「それ、なに？ クイズなら僕、苦手だよ」

「違うんだ。クイズじゃない。」カカナは微笑みを浮かべる。「覚えておくといいよ」

「今の？」ユースケは瞳を魅力的に揺らした。「もう、思い出せない」

ユースケのくったくのない、愛らしい笑顔。カカナは、一回りも年下のユースケにドキツとした。

「それより、カカナ、一緒に遊ぼう？」

「……そうだね。何をして遊ぼうか？」

「うーん」腕を組んで考えるユースケ。

カカナは必死に笑いをこらえていた。

「なわとび！」ユースケのサラサラした髪が風に揺れた。

「えーまたー！？」

2人の仲は、村人の誰から見ても美しく、また、心地よかった。

- - - -

カカナは村一番の美人だ。僕はカカナが好きだし、それはみんなも同じだと思う。でも、僕とカカナは特別なんだ。

2人の間には秘密がある。カカナの屋敷にある黒い箱。大きく、素敵な、黒い箱。

だから、2人は特別なんだ。箱の中に何が入っているか、それはカカナしか知らない。でも、他のみんなは箱の存在も知らないんだ。僕は特別であることを神に感謝している。

- - - -

最近は何事になってきた、と両親が話していた。人殺しが相次いでいるらしい。母は、僕を心配した。僕は、誰よりカカナのことを心配に思う。

カカナのためなら何でも出来る。もっと、もっと、彼女を知りたい。

カカナが家にいない時間を見計らって、こっそりと忍び込む。

全てを共有出来ればいいな。

そう思って開いた黒い箱。中にあったのは引きちぎられた死体の数々。

何故。

- - -

金属音。蝶番が外される。玄関の引き戸が開く音。

板張りの渡り廊下。

座敷。

足音が近づいてくる。僕は息を止めた。

戸が開いて隙間から眩しい光り。目が眩む。

明かりに慣れると、そこに立ち尽くしていたのは、カカナだった。カカナの青白い髪は、この世のものかと疑うほど不思議な魅力に満ちていた。

「ユ、ユースケ？」カカナは反射的に口に手を添えた。瞳はこれ以上ないほど見開いている。

「……カカナ」

沈黙が訪れる。その重さに首の骨が折れそうだ。

僕は、カカナに何て言ったら良いのだろう。果てしない沈黙に、発音の仕方を忘れてしまいそうだ。……いや、そんなものささと忘れてしまいたい。綺麗サッパリ忘れられたら、どれだけ幸せだろう。

もしそうになったら、僕はきっと、神様に投げキッスをして、毎朝のお祈りは欠かさなくなるに違いない。判然とした未来に希望を見出して、大笑いするかもしれない。

……神様。果たして、僕と彼女が救われるすべはあるのでしょうか？

「見たんだね？」そう言ったカカナの表情は、彼女の背後から差し明かりが邪魔して良く見えない。

僕は何も言わずに、ただ頷いた。

「秘密って言ったのに……」カカナはユースケの方へ一歩近づく。

「カカナ、何で？」僕の声は震えていた。

「何で？ そんなの殺したいから殺したに決まっているでしょう？ それ以外の理由なんて、全て言い訳に過ぎない」

「この人たち、カカナになんかしたの？」ユースケは箱を見て言った。

「まあ、……したね。……ユースケなら、わかってくれる？」

「人殺しなんてダメだ」ユースケの声は、今にも消え入りそうなほど、か弱い。

「そうかな？」カカナは、また一歩、ユースケに近づく。

「世界中の人がそう言う」

カカナは、苦笑した。

「それで、私にどうしろって?」

「何でこんなこと...」

カカナは、ユースケの背丈に合うように、ひざまずいて額にキスをした。

「こいつらは、私の家に喜んで入ってきて、喜んで殺されたのさ」カカナは箱を横目に言った。

「この家に来た全員を殺したの?」

「大半は死にゆく。だけど私は、君を殺していない。」

「何で?」

カカナは僕の言葉に首を少しだけ傾け、肩を竦めた。

「ユースケには、まだ、わからないことが多い」カカナは片目を細める。「フィラデルフィアがヒーローを生むのと同じ理由で、私はこの村のヒーローなんだ」

「わからないよ」

「わざとそう言ってる。今、君がわかったってしょうがないことだから」

「わざと?」

「そう。でも、いずれわかる。覚えておきな。あと、そうだね…」カカナは箱の縁に上品に座った。「君が好きだ」

ユースケは一瞬あつけにとられたようにカカナを見つめ、そして笑った。

「うわあゝ、それ卑怯」

「笑うところじゃないよ。警察を呼んできて…、私はここで待っているから」

ユースケは一度頷くと、走って行ってしまった。

カカナはしばらくそのまま動かなかった。そして、微笑む。

「わからない」ユースケの声色を真似して言った。

カカナは大きく背伸びをして、箱の中にあつたナイフを握りしめた。

- - -

戻って来たときには、カカナは血にまみれて死んでいた。手首を切ったらしい。

僕はカカナの死で、勘違いしていた幾つかのことに気づいた。

カカナは、村人にけむたがれるような存在だった。みんな口には出さないだけで、それはあからさまだった。とてもかわいそうだ。村人もカカナも。

カカナが嫌われる理由は、まだ僕にはわからない。そして、これからそれは変わらないだろう。彼女がいずれわかる、と言った言

葉は嘘っぱちだ。

僕はあれから、更にカカナの影を追うようになった。人間を殺すことにもなれてきた今だからこそ言える。

「僕は好きだよ、カカナのこと」

（後書き）

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9908a/>

それぞれ

2011年1月15日14時25分発行